

## 震災から1年後の現状

### ■ 蒲生干潟の現状

昨年の震災から1年が過ぎた。蒲生干潟では破壊された導流堤の工事が進んでいる。

(Fig.1)。閉塞した河口は開口部が確保され昨年北側にできた河口には砂がたまり、閉塞している。導流堤の構造は石積みであり、隙間はカニなどの生物が生活環境として利用できる構造である。

### ■ 干潟の生物

投網、手網を使用して生物の採集を行った。干潟内の石や杭の周辺にはケフサイソガニ、ユビナガスジエビが確認された。魚類ではチチブ等のハゼ科魚類やイシガレイの稚魚が採集された。

イシガレイ稚魚は干潟内に多く入っていた。24匹採集し平均全長は2.79cmであった (Fig.3)。昨年の調査では、順調に成長していると考えられるデータが得られたが、導流堤工事の影響なども考え、今年も同様であるか調査を続けたい。なお昨年は古い橋桁周辺でイシガレイが採集されたが今年Fig. 1の赤枠で囲んだ位置で採集された。古い橋桁付近は泥底が多いが、Fig.1の赤枠付近は砂地で比較的水深もありこのような環境がイシガレイの稚魚にとって好ましい環境なのであろう。

また、導流堤の外側（川に面した側）では全く採集することができなかった。イシガレイ稚魚にとって好ましい環境へ移動するため、また成長したイシガレイが外海へ移動するためのルートは確保されていなければならない。以前の導流堤には干潟の外と内をつなぐ水門とヒューム管があったが、現在設置されてはいない。石積みの隙間から水は出入りすると思われるが、干潟の外と内をつなぐ水路は確保する必要があると考える。2月7日に宮城県土木部河川課ら出された記者発表資料には「干潟側への流れを抑制し、河川水を海へ誘導する。」とあり、水門やヒューム管の設置についての記述はない。現在工事中であり、今後の進捗に目を向けていきたい。



Fig.1 工事中の導流堤

(Fig.2)



Fig.2 採集した生物



Fig.3 イシガレイ